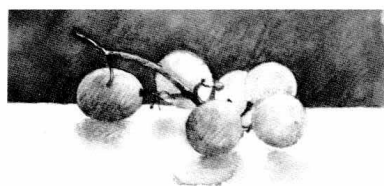


澤野久雄

還かえつて来た男

中央公論社

澤野久雄
還つて来た男



中央公論社

還つて来た男

定価一一〇〇円

昭和六十一年九月十日初版印刷
昭和六十一年九月二十日初版発行

著者 澤野久雄

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三陽社

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三四

©一九八六 検印廃止

ISBN4-12-001511-4

還
つ
て
来
た
男

裝幀
結城
信子

第一章

一

落葉のように降りかかった心ない言葉の切れはしが、人を殺すことだっていえないとはいえない。まして、そのひとことの裏側に、羨望、嫉視、反感、あるいは憎悪のようなものが見えかくれしていたら！ いや、塩見吾郎がそのとき投げかけられた言葉は、考えてみれば悪意どころか、むしろ友情と好意とに満ちたものであったと思われる。にもかかわらず、それは指先に刺さったとげの先が抜けないままに残っているような、鋭い痛みをときどき彼に感じさせるのだった。

まだ、十一月のはじめであった。

寒いとまではいえないが、ふと襟もとに冷えを意識したのは、日暮れと共に急に気温が下ったのか、彼自身の体調のせいであったか。あるいは僅か十数分前まで、はなやかなホテルのグリル

で知人と話しながら、久しぶりに肌も緩んで来るような平穩の中に、身を置いていたせいであつたかもしれない。

宵の口の赤坂一ツ木通りは、さんざめいていた。おそらく一日中で、一番、人の出盛る時刻なのだろう。塩見はバアバリーのポケットに片手を突っこんで歩きながら、パン屋のショオ・ウインドウにけしの実パンを覗いた。レストランの大きな硝子の壁を通して、若い恋人たちがナイフとフォークを閃かせながら、溢れ出る微笑の中で話し込んでいる姿を見た。陶器店の店先では、おや、こんな店、前からあったかな？ と首をかしげて、飾られている染付の茶器にしばらく見とれた。目にするもののすべてが、——行き交う人の姿も町のたたずまいも、今の彼にとっては目新しいのである。

小路の角で足を止めると、その奥には数多い広告燈が、高く低くそれぞれの存在を主張していた。寿司屋、焼肉屋、それからスナック。どの店も、人の出入りの多い時刻であろう。そこから裏通りへ抜ければ彼の知っている家も何軒かあるはずだった。馴染みの料亭のおかみや、まだそこに働いているであろう女の一人、二人の姿も、彼の目の中には蘇って来た。

——突然、顔を見せたら、吃驚するだろうな。

中には懐かしそうに走り寄って来て、彼の手を取ろうとする女もいるにちがいない。

しかし彼は、小路へ踏み込もうとはしなかった。食事はしたばかりである。酒も、いくらか入っていた。それに、

——これから先はまた、何度でも来る折があるはずだ。

彼は歩き出そうとした。と、いまちようどすれ違おうとしていた男が、急に彼の肩先で立ち止まった。思わず目が合うと、

「やあ、塩見君じゃないか。君、病氣をしていたそうじゃないか。」

古い友達であった。最近では減多に顔を合わせることもなくなっていたが、——その男の目に急に明るいものが流れて、

「お見舞いもしないで悪かったが、こんなに元気になったところが見られて、嬉しいよ。」

「ありがとう。おかげで癒った。」

と、彼は言った。

「本当によかったなあ。一時は心配したぜ。」

友達のその言葉に、嘘はないであろう。塩見はもう駄目だそうだ、という噂が、ひところ友人、知人の間を流れたと聞いている。

彼は一年ほど前から、肺ガンを病んでいたのである。いや、正確に言えば前の年の終り近くに発病して、三ヵ月間、病院生活を余儀なくされた。手術を受けて退院して、半年ほどは病後の静養に費した。漸く仕事に復帰したのは一ヵ月ぐらい前のことで、——とはいえ、最初からまともに仕事をしたわけではない。第一週は足ならしのつもりで、二日だけ会社へ行った。それも昼前に出て行って、三時すぎには帰宅してしまった。次の週は、九時から四時まで三日間。そして今

週になって、ほぼ普通りの勤務に戻ったのである。しかし夕方、人と会うために廻り道をしたのは、その日はじめてのことであった。

「また、会社へ出ているの？」

「ああ、漸く仕事には戻ったが……今日は用事があってそのホテルへ来たから、ついでにここまで足をのびした。赤坂も一年ぶりだ。」

「本当によかった。どう？ お祝いにその辺で一杯……。」

「いや、そりゃまだ遠慮するよ。何しろこんな風に町を歩くのは今日がはじめてだから、少し疲れた。」

ホテルを出てから歩いた距離といえ、まだ数百メートルにすぎまい。しかし足はやっぱり、少し重くなっていた。

「そうか。それじゃ無理にはすすめない。仲間うちで、一度集まろうかという話が起っているんだ。その時は電話をするから来てくれよ。みんな喜ぶよ。」

「ああ、よろしく言ってくれ。」

「それにしても、余り無理はしないでくれよなあ。君なんか、今更働かなくとも困るわけじゃないんだから、余生は優雅にやつてもらいたいよ。」

「ありがとう。」

それで、ちょっと片手をあげると、友達と別れた。歩き出しながら、

——余生か。余生は優雅にやってくれ、か……。

なるほど塩見はすでに六十七歳である。大学の同期生の中には、大会社の社長になった男がいる。母校の教授になった秀才もいる。しかしそういう男たちも、次々に職を離れて行っているらしい。五十五、六で停年になった男の中には、再び新しい仕事を探してあてた者もいるようだが、手にする報酬は現役のころの半ばにも達していたかどうか。しかもそういう男たちでさえ、今では二度目の引退を余儀なくされているであろう。

——俺はこれでも、案外、幸運な男かもしれないな。

社員五十人に満ため、電気会社の専務である。病氣をしている間に、一度はその椅子から離れようかと考えたことがある。長いこと欠勤していては、会社にとって迷惑である。そればかりではない。塩見のような高齢の者が、働きもせずに立ちふさがっていては、次代の人達の昇進にも影響を与えることになる。しかし彼より十歳も若い社長は、とんでもない、と首を横に振った。あなたを失ったら、会社は海中に噴火して出来た新しい島のようなものだ。何ヵ月か先には、影も形もなくなってしまう。体がよくなって出て来て下さるまで、待ちます。その間は、全員で力を合わせてなんとかしのいで行きますから。

社長のこういう言い分も、まんざら口先だけのことではないであろう。塩見がその会社へ入って、すでに二十余年の歳月がたっている。彼の前歴が物を言ったということもあるが、監督官庁には顔が広がった。関連のある業者とも、結びつきは固かった。彼の力で、彼のちょっとした

工作で、手に入れた仕事というものが今までにどれほどあっただろうか。たとえ景氣に變動はあつても、ビル建設の事業はさほど衰弱することはなかった。従つて、ビルの電気工事というものは、比較的恵まれた業種なのである。塩見が病癒えて再び会社へ顔を出した時は、社長以下、全社員が歓声をあげて迎えてくれたといつても、決して言いすぎではないであらう。

——何が、余生だ。

友達が最後に言い残したひとことを思い出して、彼は思わず肩をあげた。僅かに、胸を張つた。とはいへ、塩見は別に自分を誇示しようとしたわけではない。手術をして、左の肺の下半分をとってしまったのである。それだけ、肺活量が減つた。肺活量が減れば、何かにつけて息切れがする。そういう症状を癒すためには、胸を張り深呼吸をすることで、半分だけ残されている左の肺をふくらませるより仕方がない。果してそんなことで、残されている肺が大きくなるものかどうか彼には分らないが、主治医がそうする方がいいと言うから、そうしているだけのことである。その時だった。

彼は思わず、おや、と呟いた。道の向こう側、十メートルほど先に、大きな中華料理店の広告燈が見えていた。その下の朱で縁どりした扉を押しあけて、若い娘が姿を現わしたのである。

——誰だったかな？ あれは……。

二十歳には届いているだろうか。やせぎすの体に、長目の合いのオーヴァは品がよかった。髪が、肩の辺りで揺れて光った。たしかに知っている娘だ、と彼は思った。それも、一度や二度顔

を合わせたという程度ではない。

ところが、娘が人を迎えようとしてもするように、いま自分の出て来た店の方をふり返る。と、店から流れ出す燈火が、偶然、面明りの役目をした。娘の化粧が思いがけなく濃厚だった。塩見のような年齢の男の目には、それは素人娘の化粧とは見えない。いや、原宿へでも行けば、そんな装いの娘がいくらでも遊弋しているだろうか。

娘が再び、こちらへ向き直った。視線が塩見の上まで伸びて来た。やはり知っている顔だ。いま、その顔に微笑がうかぶ、——と彼は思う。が、娘の目にはなんの反応も起らなかった。全く見ず知らずの他人の目である。

——おかしい。たしかに見覚えがあるのだが……。

彼は入院中に世話になった、何人もの看護婦を思い起した。如何にも真面目そうな娘がいた。おしゃれな子もいた。塩見が大変に心易くなった娘もいる。中には、終始、礼儀正しく、しかし最後まで打ちとけることのなかった中年女もいることはいた。しかし、いま見ている娘は、彼女たちの中の誰一人にも似ていなかった。

娘の背後で、また店の扉が開いた。中年の男が、姿を現わす。支払いでもしていて、一足遅れたであろう。しかし男をふり返る娘の顔には、今度はあでやかな微笑が泛かび上った。目が濡れたように光るのが、塩見にも見てとれた。男と娘の顔が寄って、短く囁き合う。向こうに知っている人が居るの、見ないで、——とでも娘は言ったのではないか。二人はそのまま塩見の方へ

背を向けると、肩を並べて歩き去ろうとした。行き交う人波の中に見えかくれしながら、男の背にはもう、娘の一方の腕が柔かい蔓草の蔓のように巻きついている。

二

けれども、やがて七十歳に近い男の意識の中では、そんな若い娘はいつまでも影を落してはいなかった。

代々木駅から程遠からぬ塩見の家には、ようやく平穩が戻って来ていたのである。

一年前、——つまり彼がガンに捉われたと分った時からあと、この家はいつも風の夜の海のよりに逆巻いていたものだ。逆巻く波浪のように、吠えつづけてもいた。それまでは夫婦と、いわば家政婦代りの中年の女が一人居るだけで、塩見が出かけたあとなど、昼のさなかでもむしろひっそりとしてしまったものだが、塩見が入院すると、逆に来客が非常に多くなった。見舞客が直接彼の病室を訪ねることを遠慮して、わざわざ家まで足を運ぶのである。親戚の者も塩見の子供たちも、——彼等はもちろん病室にも顔を見せたが、主人が留守にしている家へも、入れかわり立ちかわり出入りした。

塩見には、三人の子供がいた。長女は神戸の貿易商に嫁いでいたし、次女は小田原の高校教師の妻になっていた。一番末に生まれた息子の森夫も、すでにその家を出て、大きな自動車会社に

勤めている。そういう息子や娘たちが、それぞれの子供を連れてやって来たりすると、この家の主が危険な崖っぷちに立たされているとはいっても、家の中は一応賑わうようであった。それが、塩見が退院して予後が意外に順調だと分ると、人びとの来訪は目に見えて減って行った。今ではもう、息子も娘も減多に顔を見せない。家は以前の静かさをとり戻した。塩見の妻啓子の顔にも、ようやく安堵の色が滲^たみ出しているのである。

とはいえ、一年前までは六十キロに近かった塩見の体重は、十キロ近く減ってしまっていた。再び外出用の服を着るようになってみると、以前の上衣は肩幅が余った。ズボンのベルトは、三、四センチほど詰めなければならぬ。

「服もオーヴァも、新しくお作りにならないと、借り着のようでおかしいわ。」

しかし彼の顔は、——ひところは半分削ぎ立ったように見えたものだが、——今ではほとんど以前のままに戻った。血色も、決して悪くはない。外出先で、彼が病気をしたことを知らない人に出合うと、やあ、いつお会いしてもお元気なようで。そんな時、彼はありがとうと言うだけで、この一年間、どんなに不安な月日を重ねて来たかということについては、何も口にしなかった。それを言えば行きがかり上、発病から治癒までの経過を必ず説明しなければならなくなる。それは今日までに何十回となく繰り返して来たことだし、とどのつまりは、話す方にとっても聴き手にとっても、愉快なことではないのである。

しかし妻の啓子は、立ち返った安堵の中でも、おそらく朝夕、彼の顔つきを観察しているので

あろう。塩見が会社から帰ると、まず、

「お帰りなさい。」

と言う。これは何十年来、きまりきった挨拶である。しかし次に続く言葉は、日によって様々に変った。

「今日は少し、疲れていらっしゃるわね。」

「今日は、割合お暇でしたのね。」

ある日は、

「あら、今日はまた頬がこけた……。」

もともと、そういう体質なのだろう。彼は忙しい思いをすると、すぐそれが顔に出るのだった。夜になって、ひどく面^{おもて}寒れしていることがある。しかし、日によって見られるそういう頬の衰えは、ひと晩眠れば大抵は回復しているのである。

その日、雨が降った。

いや、朝のうちは曇っていたとはいえ、やがて陽のこぼれて来そうな空模様だったのが、昼下りから時雨^{しぐれ}て来て、やがては本降りになりそうだった。会社の専務室の窓から見ると、四谷駅へ向かうお濠^{せう}ぞいの道は、もうすっかり濡れていた。街路樹の枯葉も、水を含んで重そうに垂れている。

会社の建物から駅までは、歩いて数分にすぎない。若者なら洋傘がなくても、このぐらいの降

りなら当然歩くであろう。塩見も病後は、なるべく歩くことにしていた。車ばかり頼っていては、脚が弱くなると思うからだ。しかし、今日は辛いと思った。雨の中ではどうしても急ぎ足になってしまう。しかもそのあとで、駅の長い階段を上り下りしなければならぬ。胸の鼓動がひどくなって息苦しくなることは、目に見えていた。その上、濡れて風邪でもひけばどうなることか。咳き込むようなことがあれば、半分になった肺は痛みに堪えないであろう。

——タクシーが拾えればいいが……。

と思った時、若い女の事務員が入って来て、

「あの……会社の車が用意してあります。」

以前は、会社の車を私用に使うことを極力避けていたのだが、社長の木原が心配してくれたというから、珍しく代々木まで送ってもらった。

「あら、送って頂いたの？ それはよかったわ。」

妻の啓子は、その日、夫を迎えてそれ以上何も言わなかった。おそらく彼の顔に、疲労の色はなかったであろう。

しかし夕食の卓子で向かい合ってみると、啓子は妙に言葉数が少なかった。平常から、決してお喋りな女ではない。といって、特に寡黙なわけでもなかった。それが、その日に限って黙々と箸を運んでいる。小さなステーキの、焼き加減はどうかとも言わない。煮つけの野菜の味つけが、薄すぎたかとも訊かない。

「雨で今夜はいっそう静かなようだな。」

と、彼は言った。家事を手伝っている冬子が、ちょうど台所^{キッチン}へ下った時だった。この家では朝は台所の卓子で、三人揃って食事をするのだが、夕食は夫婦二人だけが洋風の居間の卓子で向かい合う、それが永年の習慣であつた。

「おや、それでも風が出て来たかな？」

塩見がそう言ったのは、不意に小石でも投げつけるような雨の音が硝子戸を打ったからである。耳をすますと、庭の立木が雨の中でざわめいているようだった。

「どうした？ 何かあったのか。」

妻の方からは切り出しにくいのだと気づいて、彼の方で問いかけることになった。すると妻が、ちらと塩見を見た。そしてふと、気弱な微笑を見せると、

「今日、布貴さんから電話がありましたわ。」

「ふむ。」

一人息子の森夫は三十三歳である。布貴と結婚して、すでに三年はすぎている。二人の間には、とかく隙間風が吹いているようだった。それは塩見が発病する前から、親たちにはうすうす分っていたことだ。それでも塩見が入院生活をはじめたあとは、一種の妥協が成り立ったかに見えた。しかしそれも、結局は一時的な停戦にすぎなかったのかもしれない。父親の生命がひき延ばされて、塩見家の危機が一応は回避されたと思うと、若い夫婦の間には再び波風が立ち始めたのであ